

イスラム管見

定方 晟

最近、日本人がイスラム教やイスラム教徒と接触する機会が多くなった。日本人とキリスト教のつきあいは1549年以來の長い歴史を持っている。徳川時代には鎖国や切支丹禁令があり、日本人はキリスト教から遠ざかったが、長崎の出島を通じてキリスト教文化を知る機会があり、明治時代には文明開化によってそれを一挙に身近なものにした。それに対し、日本人とイスラム教の接触は始まったばかりである。

日本の経済発展により、外国人が日本に仕事を求めて流入し、イスラム圏からも多くの人が到来するようになった。それに伴って日本各地に來日イスラム教徒のためのモスクが作られたり、東京に古くからあるモスクが増改築されたりするようになった。また、後退した共産主義勢力にとって替るかのようにイスラム勢力が世界的な活動を見せるようになった。日本の新聞やテレビにもイスラムという言葉が登場することは珍しくなくなった。

こうした状況の中で、われわれ日本人はイスラムを知る必要に迫られている。「イスラムを知ろう」というキャッチフレーズもよく目や耳にする。しかし、イスラムを知る努力は、いまのところテレビで信徒の礼拝風景を見るなど、皮相的な段階にとどまっている。これからはイスラムの教義や思想を知る努力が必要である。

新しい宗教に接するときは、ひとは当然ながら種々の疑問に遭遇する。私はその種の疑問をいくつか提示してみよう。仏教研究者としての私の考察は仏教的視点に影響されるだろう。その意味で、私のこの論考はおのずから比較宗教の意味を持つだろう。

私は本誌前号で「聖なる憎悪」という題の論考を発表し、その中でイスラム教にふれた。西アジア文明を専攻する同僚の菟原卓氏が、これを読み、私にイスラムに対する誤解があるといった。私はその可能性を否定しない。私はイスラムの教義については、井筒俊彦訳『コーラン』（岩波文庫）を読んだだけであり、注釈書は利用したことがないからである。しかし、コーランは文が明快である。注釈がなくても、十分に理解できる。しかも、井筒訳には簡単ではあるが括弧つきで注が施されている。私は今回も、井筒氏の訳にもとづいて見解をのべることにする。

繰り返すが、私は私に誤解がある可能性を否定しない。そのため論考の題に「管見」という言葉を用いた。また、私の論考に対し、専門家が批判的・啓蒙的な論考を発表してくれるよう期待している。日本人がイスラムをその功罪両面において知る必要があるとすれば、種々の文化の研究者を擁するわが文明学会こそ、これに応える絶好の場ではないかと考えている。

1. 平等

イスラム教の解説にしばしば見られる記事の1つに「イスラムにおいては神の前にすべての

人間が平等であるという考えが徹底している」というのがある。テレビに映るメッカの巡礼風景で、白い肌の人々、黒い肌の人々、アジア系の顔をした人々、アフリカ系の顔をした人々、様々な人が一体となって行動している様子を見ると、われわれは、イスラムの神の前では人間は確かに平等であるという思いに打たれざるをえない。

また、イスラム教には特別の地位を持つ人間がいない。キリスト教の法王や牧師に当たる人間がいない。ウラマーと称される人がいるが、これは一般の信者の中の、コーランに通じた人が、指導的役割を引き受けるものにすぎない。小杉氏はウラマーと牧師の違いを論じ、牧師についてつぎのように述べる。

キリスト教の場合には、聖職者は平信徒という「羊」を導く役割を担う。新教の「牧師」という表現はそれを示している。(小杉泰『イスラームとは何か その宗教・社会・文化』、講談社現代新書、1944、p.149)

コーランが、イエスは神ではない、予言者にすぎない、と繰り返し強調するのも、コーランがあらゆる人間を平等視することの現れであろう。これは人間はあくまでも人間であるとするもので、この点でイスラム教はキリスト教より合理的であり、キリスト教徒の中の合理主義者たちを引きつける。

コーランがキリスト教の三位一体説を斥けるのも、三位一体説がイエスとヤハウエ（アッラー）を同格視するからである。キリスト教の一派アリウス派はキリストを第二の神にすぎないとして異端として斥けられたが、コーランの立場はアリウス派の立場に近い。

だが、忘れてならないのは、ここで平等の扱いを受ける人間はあくまでもイスラム教信者に限られることである。非信者は徹底的に差別される。そうでなければ、「アッラーは審きの日の主宰者である」（コーラン、1-3）という一句が無意味になる。コーランの中からこの種の差別を示す言葉を探すのは容易である。たとえば、

信仰を抱き、かつ善行をなす人々に向かつては音信を告げ知らしてやるがよいぞ。彼らはやがて潺々と河水流れる緑園に赴くであろうことを。(2-23)

まことに、信仰なき者どもは、お前（マホメットを指す）がいかに警告しても、また警告しなくとも同じこと。(いずれにせよ) 信仰に進み入ることはなからうぞ。アッラーは封緘をもって彼らの心を閉ざし、またその耳を閉ざし給うた。またその眼には覆いが掛けられている。彼らには大きな懲罰が加えられるであろうぞ。(2-5)

イブラーヒームが「主よ、なにとぞここ（メッカ）を安居の場所となし給え。その住民には果実を日々の糧として与え給え、(少なくとも) アッラーと最後の日を信ずる者どもにだけは」と言った時のこと。(その時アッラーは) 言い給うた「(よろしい)。だが信仰なき者どもらは、はかない楽しみを与えた上、その後で劫火の刑罰に突き落として

くれようぞ。何とおそろしい末路であることか。」(2-120)

コーランは信者と非信者を区別するだけでなく、「啓典の民」という第三のカテゴリーを設ける。これはユダヤ教徒、キリスト教徒、イスラム教徒をさし、コーランはかれらを「啓典の民」とし、そうでない民と区別して特別視する。

まことに、信仰ある人々（イスラム教徒）、ユダヤ教を奉ずる人々、キリスト教徒、それにサバ人（キリスト教の一派）など、誰であれアッラーを信仰し、最後の（審判の）日を信じ、正しいことを行なう者、そのような者はやがて主から御褒美を頂戴するであろう。(1-59)

しかし、コーランの厳しい基準に照せば、「啓典の民」の中で、アッラーの恩寵にあずかることのできる真の信徒の数は僅かである。キリスト教徒といえども、イエスを神と信じるなら、アッラーの恩寵から遠ざけられる。

これ啓典の民よ（ここではキリスト教徒への喚び掛け）、汝ら、宗教上のことで度を過し（三位一体やキリストの神性の教義などを指す）ではならぬぞ。アッラーに関しては真理ならぬことを一ことも言うてはならぬぞ。よくきけ、救主イーサー（イエス）、マルヤム（マリア）の息子はただのアッラーの使徒であるにすぎぬ。また（アッラー）がマルヤムに託された御言葉（「ロゴス」の直訳）であり、（アッラー）から発した靈力にすぎぬ（神でもないし、「神の独り子」でもない）。されば汝ら、アッラーとその（遣わし給うた）使徒たちを信ぜよ（とくにキリストだけを有難がるな、という意）。決して「三」などと言うてはならぬぞ（三位一体の否定）。差し控えよ。その方が身のためにもなる。アッラーはただ独りの神にましますぞ。ああ勿体ない、神に息子があるとは何事ぞ。天にあるもの地にあるものすべてを所有し給うお方ではないか。保護者はアッラーお独りで沢山ではないか。(4-169)

「神はすなわちマルヤムの子メシアである」などと言う者ども（キリスト教徒を指す）はまぎれもない邪宗の徒。言うがいい、「もし（アッラーが）、マルヤムの子メシア、その母（聖母マリア）、否、地上のあらゆる人間を滅ぼしてしまおうとなさったら、アッラーをいささかたりとも取り押えることが誰にできよう」と。(5-19)

イスラム社会では女性に対する差別も顕著である。女性には生活上のさまざまな制約が設けられているが、それはコーランのつぎのような言葉を背景にしているだろう。

アッラーはもともと男と（女）との間には優劣をおつけになったのだし、また（生活に必要な）金は男が出すのだから、この点で男のほうが女の上に立つべきもの。だから貞

淑な女は（男にたいして）ひたすら従順に、またアッラーが大切に守って下さる（夫婦間の）秘めごとを他人に知られぬようそつと守ることが肝要。反抗的になりそうな心配のある女はよく諭し、（それでも駄目なら）寢床に追いやって（こらしめ、それも効がない場合は）打擲を加えるもよい。（4-38）

しかし、女性差別はコーランの中ではあまり目立たない。目立つのは非信者を差別する精神の苛烈さである。この非寛容さが世界の平和を脅かす原因になっていることは否定できないだろう。

最後に人間の尊厳を重視する立場からの疑問をつけ加えよう。コーランはいう。

彼（アッラー）はその奴隷たち（信者のこと）に絶対の君主として臨み給う。（6-18, 6-61）

井筒氏の注が正しければ、アッラーの信者はアッラーの奴隷ということになる。イスラム教は人類すべてが平等であるというが、それは奴隷として平等であるということの意味するのであろうか。もしそうなら、キリスト教が信徒を「羊」とするのと大同小異ではないか。

2. 全能

一神教は神の全能を強調する。しかし、人々からは絶えず次のような疑問が発せられている。「もし神が全能でありかつ人間を愛するのであれば、どうして神は悪（天災、犯罪、貧困など）が蔓延しているこんな世界を創造したのか。」

アメリカの University of Notre Dame の教授で、宗教哲学と論理学を専攻する学者プランティンガが如上の疑問を払拭しようとして弁神論を展開した。私はその議論を批判したことがある。（「プランティンガの詭弁」『東方』13号、東方学院、1997）

キリスト教と同じ一神教に属するイスラム教が神の全能を強調するのは当然である。むしろイスラム教のほうがキリスト教よりも強くそれを強調するであろう。というのは、イスラム教は神と人の間に仲保者の存在を許さないほどに神を絶対視するからである。

コーランの中から「全能」や「あらゆる権能」という言葉を見つかるのはむしろかしくない。たとえば、

まことにアッラーはいかなることも思いのままに爲し給う。（2-18）

アッラーこそ、かしこくも全能全知の御神。（3-55）

プランティンガは全能の神への人々の疑問に彼なりに答えようとしたが、イスラム教徒ならば同じ疑問に何と答えるであろうか。

プランティンガは、全能の神なら何でもできるはずだ、なぜこんな世界を創ったのかという人々に対し、つぎのようにいった。「このような存在者の力には限界がまったくないのだ

ろうか。その存在者は、たとえば、四角い円や結婚している独身の男を創造できるだろうか」。私はこれに対しつぎのように書いた。

「このような存在者の力には限界がまったくないのだろうか」とプランティンガがいうとき、私は笑ってしまう。かれは全能という言葉の意味を知らないのだ。四角い円を創ることができるのが全能なのだ。(『東方』13号、p.64)

またプランティンガの著書の翻訳者・星川啓慈氏によると、プランティンガは「悪を凌駕する善をふくむ世界は、悪をふくまない世界よりも全体として優れている」とみなしているという。プランティンガは神が悪を創造したことを弁護するために、悪の存在に意義を認めようとしたのである。私はこれに対してはつぎのように書いた。

テレビの報道を見ると、ユーゴスラビアやルワンダで民族と民族が殺しあい、親は子を失い、子は親を失って、泣きながらさ迷っている。殺されて食べられた幼い娘を思い出して涙する親たちがおり、誘拐された子供の運命を案じて一睡もできぬ親たちがいる。これらの悪を凌駕する善とはいったい何なのか。ある人々の善のために、ある人々が悪の犠牲になる——これほど傷ましい光景があるだろうか。私ならば、みんながともに苦しむほうにまだしも救いを見出す。現実の世界を忘れて机上で論証にふけるプランティンガの努力が私には大変むなしのものに感じられた。(p.67)

「全能」に関するこのような難問をイスラム教徒の身近な問題で論じれば、こうである。かつてイランとイラクが戦争をした。両方ともイスラム教国である。双方が「アッラー・アクバル」と唱え、味方の勝利を祈り、敵の敗北を祈った。双方の祈りに同時に応えることは人間には出来ない。しかし、全能の神にならざるはずである。(私の考えでは、それができるとを全能という、ということはすでに述べた。)

この戦争は結局、国連による停戦決議で終結した。イランの願いも、イラクの願いも実現しなかった。では神は全能ではなかったのか。あるいは神は存在しなかったのか。存在しても信者の祈りには無関心だったのか。

こんな反論があるかもしれない。「部分的にはイラン側が勝ったこともあるし、イラク側が勝ったこともある。したがって神は双方の祈りに応えたことになる。」これに対する私の答えはこうである。「イランやイラクが願ったのは全面的な勝利である。神はこれには応えていない。神の全能は依然として証明されていない」

3. 平和

今日イスラム圏では挨拶用語として「サラーム」という言葉を含む言葉が使用されている。アラビア語では「今日は」のことを「アッサラーマ・マライクム」といい、「さようなら」のことを「マッサラーマ」という。アラビア語はつぎの国々で使用されている。(建設OD

A研究会編『55カ国語で話そう』、山海堂、1992による)

アラブ首長国連邦、アルジェリア民主人民共和国、イエメン共和国、イスラエル国、イラク共和国、エジプト・アラブ共和国、オーマン国、カタール国、クウェート国、サウジ・アラビア王国、ジブチ共和国、シリア・アラブ共和国、スーダン共和国、ソマリア民主共和国、チャド共和国、チュニジア共和国、バーレーン国、モーリタニア・イスラム共和国、モロッコ王国、ヨルダン・ハシミテ王国、リビア、レバノン共和国。

他の言語を話すイスラム教国にもこの挨拶用語は取り入れられている。

イラン (ペルシャ語) — サラーム
パキスタン (ウルドゥー語) — アサラマレコム
インドネシア — スラマッジャラン
マレー — スラマッジャラン

イスラム教国ではないが、同系の言葉を挨拶用語にしている国にイスラエルがある。

イスラエル (ヘブライ語) — シャローム

上記のリストにはインドが含まれていないが、いつか「サラーム・ボンベイ」という映画が作られたところを見ると、インドでもこの語が挨拶用語としてかなり通用しているように思われる。

これらの挨拶用語に含まれる「サラーム」という語幹は「平安」を意味するという。「イスラム」という言葉にもこの語幹が含まれているという。日常これだけ多く「平安」を意味する言葉が飛び交っているなら、イスラム圏はさぞ平和にみちた世界であろうと思いたくなるが、事実は逆である。世界の中でこの地域くらい紛争が執拗に続く地域はない。現にこの論考を書いている2000年10月、イスラエル治安部隊とパレスチナ住民の衝突が連日のように報じられ、イスラエルに対抗するためアラブ首脳会議が開かれ、アメリカが仲介に乗り出すほどになっている。

イスラム教は戦闘的な宗教であるというイメージは古くから定着している。「片手にコーラン、片手に剣」という言葉はわれわれの脳裏でイスラム教と固く結びついている。最近のイスラム原理主義の過激な行動は、われわれにとって知識に過ぎなかったものを確信に変えた。

イスラム原理主義はイスラムの異端であるという考えがあるかも知れない。しかし、コーランにつきのような言葉があるからには、かれらは異端であるどころか、コーランに忠実な正統派であり、彼らを批判するイスラム教徒こそ近代思想の影響を受けた異端のようにみえる。

宗教がすべてアッラーに帰するまで彼らと戦い続けよ。(8-40)

神聖月があげたなら、多神教徒は見つけ次第、殺してしまうがよい。(9-5)

こうしてみると、イスラム教徒の挨拶用語は、彼らの社会が平和に満ちていることを示すものではなく、平和の欠如を示すもの、平和への渴望を示すものということになる。

「平安」がいかなるトラブルの欠如を意味しているかについては二つの解釈が可能である。一つは人為的なトラブル（戦争、抗争）の欠如。一つは自然的なトラブル（落石事故）、あるいは人為的であっても不意のトラブル（交通事故）の欠如。もしイスラム教徒の挨拶の「平安」が後者を意味するなら、その挨拶に深刻なことは何もない。

しかし、ユダヤ教の聖典（旧約聖書）やイスラム教の聖典（コーラン）に人為的で作意的なトラブル（民族的、宗教的な抗争）に関する激しい言葉が溢れていること、一方ではヨーロッパ諸国や日本のように挨拶は天候を話題とする平凡なもの（「グーテンターク」「今日は」）が多いことを考えると、イスラム教徒の挨拶はやはり特殊であり、いかにも紛争の世界が生んだ挨拶らしく見えるのである。

しかし、たとえそうであっても、相手に向かって「平和がありますように」と祈る心は美しい。その上で私は、そのような挨拶が必要でなくなるような社会が一刻も早くかれらの間に訪れることを望んでいる。かれらの聖地エルサレムが名実ともにエルサレム（「平和のいしずえ」を意味する）となることを望んでいる。